

FUKKOU

Vol. 7



contents
目次

交わりの豊かさ

○巻頭言

交わりの豊かさ

宮原 浩二郎 1

○報告

「つぶやき」読み解く

～研究会を連続開催

山中 茂樹 2.3

○調査

四川大震災調査報告

室崎 益輝 4.5

○観感学楽—被災地ネット

NPO 法制定から 10 年を迎えて

—『災害ボランティア論入門』より

/ 菅 磨志保

また、違った課題が

/ 安富 信 6

○研究所フォーラムについて

2009 年 1 月 11 ～ 12 日

..... 7

○事務局だより

吉右衛門「教授」が特別講義！（山中茂樹）

日本災害復興学会 会員募集中！

編集後記 8

関西学院大学社会学部教授

宮原 浩二郎



10月の初め、南山大学宗教文化研究所で「災害復興と社会美学」について話をする機会があった。災害の研究者は少なかったが、宗教学や哲学、教育学などの分野から被災者支援と復興を考えようとする真摯な声に囲まれた。意見交換は「復興」「豊かさ」「成熟社会」「社会美学」の考え方におよび、目先の実務や利害をこえた、幸福な時間を過ごすことができた。

収穫の一つは、「豊かさ」について改めて考えを整理できたことである。内閣府（旧総理府）の意識調査によれば、生活目標として「心の豊かさ」を選ぶ人が「物の豊かさ」を選ぶ人を追い抜いたのは1980年前後である。以来、その差はますます広がっている。にもかかわらず、現在の社会には以前にまして「心貧しい」肌ざわりがある。さらに、近年の「格差社会」が再び「物の豊かさ」への渴望を助長している。

おそらく、「物か、心か」を選択させる発想、これが貧しいのだ。私たちは「物はあるが心が貧しい」「物はなくても心は豊かだ」などと口にする。しかし、ここには「心」を「物」と同じ個人の所有物とみなす観念が入り込んでいる。「心の豊かさ」は「豊かな心を持つこと」とされ、たとえば趣味や余暇を「持つ」という風に、何かを私的に所有することに帰着してしまう。

やっと気づいたのだが、「心の豊かさ」という不器用な言葉の奥底には、まっとうな社交性への欲求がある。本当は、自分が豊かさを所有するのではなく、他の人々との関係のなかで、人と人の交わりが生み出す豊かさを味わいたいのだ。この「交わりの豊かさ」はGDPのように数値化できないが、私たちはこれを「美」の一種として、「社会美」として、感じとることができる。「交わりの豊かさ」は、他人と奪い合う必要のない、古くて新しい富である。

大災害は道路や住宅や公共施設を壊すだけでなく、人と人との交わりに深い傷をもたらす。「孤独死」がその極北である。ここ数年の災害復興研究は「関係性の豊かさ」「軸ずらし」「つぶやきを拾う」「住まいの社会性」「国民総幸福」などに着目してきたが、そのいずれもが「交わりの豊かさ」に指向している。ここに「人間復興」の理念を深める方向性が示されている。思想的、概念的な反省を重ねながら、具体的、実務的な提案に結実させていくことが、ますます求められていると考える。

(2008年12月)